



今は昔、
世界の果てに、
小さなたね屋が
あったとき。



息の跡

trace of breath

監督・撮影・編集：小森はるか
 編集：秦岳志 整音：川上拓也 特別協力：瀬尾夏美
 プロデューサー：長倉徳生、秦岳志
 助成：文化庁文化芸術振興費補助金
 製作：カサマフィルム+小森はるか 配給：東風
 2016年/93分/HD/16:9/日本/ドキュメンタリー
www.ikinoato.com

陸前高田から届いた、忘れられない風景の記録。映像作家・小森はるか、待望の劇場長編デビュー作。



細いホースのさきからちょろちょろと水が流れ、見えてはいないポンプの音がかぶさるとき、これが音響の映画だと人は忽然と理解する。不穏な津波の音に代わって、即席の井戸がいつきの生を謳歌するが、最後には解体されるしかない。あたかも、それが息の跡だというかのように。傑作である。
蓮實重彦 (映画評論家)

真の怪物“大津波”襲来後の、荒涼とした大地にぽつんと残された男。「かつて普通の日本のたね屋だった」彼の生の形が、スクリーンに立ち上がる。大ヒット怪獣映画やアニメーション以上に心さわぎ、揺さぶられるのは、これが実在の人物の本物の戦いだからだ。
澤田康彦 (『暮しの手帖』編集長)

長い時を超えて今に伝わるどんな伝説や神話も、実際に机の上で文字に刻まれた時は、きっとこんなふうだったに違いない。それをみごと捉えた監督の「息の跡」が、最後には叫びとなって天に立ち昇る。
榎木野衣 (美術批評家、多摩美術大学教授)

ひとりのたね屋が綴った、彼の町の物語 いまは、もういない誰かへ、まだいない誰かのために

岩手県陸前高田市。荒涼とした大地に、ぽつんとたたずむ一軒の種苗店「佐藤たね屋」。津波で自宅兼店舗を流された佐藤貞一さんは、その跡地に自力でプレハブを建て、営業を再開した。なにやらあやしげな手描きの看板に、瓦礫でつくった苗木のカート、山の落ち葉や鶏糞をまぜた苗床の土。水は、手掘りした井戸からポンプで汲みあげる。

いっぽうで佐藤さんは、みずからの体験を独習した英語で綴り、自費出版していた。タイトルは「The Seed of Hope in the Heart」。その一節を朗々と読みあげる佐藤さんの声は、まるで壮大なファンタジー映画の語り部のように響く。さらに中国語やスペイン語での執筆にも挑戦する姿は、ロビンソン・クルーソーのようにも、ドン・キホーテのようにもみえる。彼は、なぜ不自由な外国語で書き続けるのか？ そこには何が書かれているのだろうか？



fb.com/ikinoato @ikinoato www.ikinoato.com

ふわりとした、けれど、確かなまなざし
まるで、生まれたばかりの映画のように

監督は、映像作家の小森はるか(『the place named』、『波のした、土のうえ』*瀬尾夏美との共同制作)。震災のあと、画家で作家の瀬尾夏美とともに東京をはなれ、陸前高田で暮らしはじめた彼女は、刻一刻とかわる町の風景と、そこで出会った人びとの営みを記録してきた。失ったものと残されたもの。かつてあったものと、これから消えてゆくもの。記憶と記録のあわい。そのかすかな痕跡とぬくもりを彼女はうつしだしていく。あの大きな出来事のあとで、映画に何ができたのか。そのひとつの答えがここにある。

- 2023年3月31日(金)
- 18:30~20:10
- 京都大学 稲盛財団記念館 1F
旧・京都賞ライブラリー

入場無料

- 主催：京都大学東南アジア地域研究研究所「映像で学ぶ東南アジアの文化と社会」
- お問い合わせ kamiya@cseas.kyoto-u.ac.jp (神谷)

来場者事前登録にご協力ください
<https://forms.office.com/r/rjF72v7pMr>

